



り出しているといえます。

また、社員が幸せを感じられるように家庭を最優先させる仕組みをつくり実践している例では、他に類を見ないほどの時間生産性をあげるという結果を出しています。ただ、家庭優先を評価する一方で、将来的には男女が等しく家庭と仕事を両立させ共に幸せを追求できる社会環境にしていかなければならない、という意見もありました。

■実際の経営に女性を生かす視点とは

女性は木を見て、男性は森を見るというような、お互いの特性を知る必要があります。同時に、男性と共に働くことで女性の強味がより活かされることを認識しました。しかしながら、組織全体を考えたり提言することの経験や能力は十分ではなく、女性にはマクロからの視点をもつことや様々な制度を学ぶ努力が求められていると思います。意見を発していくためのスキルを上げていかなければならないのです。そういったことの積み重ねにより労働の質を上げ、短時間労働やワークライフバランスの実現を可能にしていけます。

ただし、自治体の法制度だけでそれらを推し進めていくことは難しいのではないかと考えています。経営者には、社員の技術だけでなく質を評価するという課題が発生してくるでしょう。各人の必要性を認め、それぞれの企業がそれぞれの仕組みをつくっていくことも経営者の役目です。

また近年、仕事に対する考え方に男女の差は見えず、むしろ女性の積極性のほうが際立っているようにも感じられ、バランス感覚や教育が必要かもしれません。

まずは、本音で語れる場を設け会社の風通しを良くする努力が必要です。上司が指示命令をせず社員が「やっている感」で積極的に働くことは、確実に業績の向上につながっていきます。

■今後、目指すことは

ディスカッションの終わりに際し、女性社員に対してあるいは女性経営者としてこれから何をを目指すのかを発表しました。仕事においても生活の場でも自立した人になることが望まれています。

「あったらいいな」という意見が言えること、その意見を聞き取り商品やサービスに生かし職場の改善に生かすことを目指します。その循環を整える経営者に自らがなり、

いずれ社会全体にも広げていく努力をしたいと考えています。自分の提案が活用される喜びを感じられる社会にしていきたいのです。

それには数の力も必要ではないでしょうか。女性の就業者数を増やすことです。女性のリーダーを育成したり起業を志す人には積極的な支援をして、経営者が増えることを期待しています。

・まとめ

成熟社会で商品の差別化がしにくい中、女性の感性による新しい価値の創造が必要になってきています。今日のディスカッションが先行き不透明な状況の突破口を開くきっかけになれば幸いです。

グループ討論

「女性の能力を今後の経営改善にどうつなげるか」をテーマにグループ討論を行いました。仕事上の能力について性別で限定する考え方に異論を唱える男性の声は多々あり、同業種でも企業により状況は大きく異なる例が挙げられるなど、各グループとも熱のこもった意見を交わしていました。

議論を深める中で女性の特性を生かす方法が見えてきたようです。具体的な例として、仕事を任されると大きなパワーを発揮するということです。ただし、その責任を回避する傾向にあることは否めないのですが、責任は経営者とする覚悟ですまは任せることです。また女性は感性が豊かなので良いパフォーマンスを引き出せば、経営に大きく貢献できると考えます。そのために経営者がなすべきは、女性が仕事を好きになるような仕組みを作ることです。さらにトレンドに敏感だということがあり、それを生かすために経営者は制度を整えることです。

男性と女性、社員と経営者、それぞれの連携が重要であると改めて感じた討論になりました。

【講評】 上田 隆一氏

司馬遼太郎が「坂の上の雲」で描いたのは人生50年の時代でした。しかし、生涯80～90年の時代となり、坂を登りきったあとにまた次の坂があるのです。今この「男女共同参画」と言われる社会は一つ目の坂にすぎません。本来あるべき姿の「男女共同社会」を目指すために次の坂がそびえています。

今は育児・介護を役割分担していますが、共に家族を守り共に担っていくようにしなければなりません。互いに尊敬の念を持ちながら、男性と女性が共同で経済活動を行う社会にしていかなければならないのです。今日の討論を通じそのことに気づいた方もいると思いますが、その気づきから実現に向けて共に行動を起こしましょう。